0614C1400-5

大学のさらなる社会貢献に向けたアウトリーチのあり方
～開発した手法とその有効性～　（第2報）

○内島典子（北見工業大学 社会連携推進センター）
高橋宏和（北見工業大学 工学部 情報システム工学科 マネジメント工学コース、
現：株式会社富士通ミッションクリティカルシステムズ）
鞘師　守（北見工業大学 社会連携推進センター）

1．はじめに

アウトリーチとは、受け手の必要とする情報やニーズを汲み取り、それらに対して適切な情報を的確に伝える活動である。近年、大学では、大学の社会貢献向上を目指し、様々な活動や情報発信を展開している。産学官連携活動を更なる大学の社会貢献活動向上につなげるためには、あらゆるステークホルダに対し関連するアウトリーチを行っていくことが重要と考えられる。そこで、筆者らはこれまでに、大学のアウトリーチ活動のあり方を検討していくための、大学における活動の全体像を把握・解析する手法を開発した[1)]。

本研究では、開発した手法を用いて北見工業大学の活動と情報発信の実態を可視化し、アウトリーチを進める上での課題抽出における本手法の有効性を確認した。

2. 開発した手法の有効性確認

1）開発した手法

大学のアウトリーチ活動のあり方を検討するためには、**図1.①**に示す3点を満たす必要がある。開発した手法は、これらの3点を同時にかつ視覚的に捉えることを目指したマトリクスを用いた解析方法である[1)]。

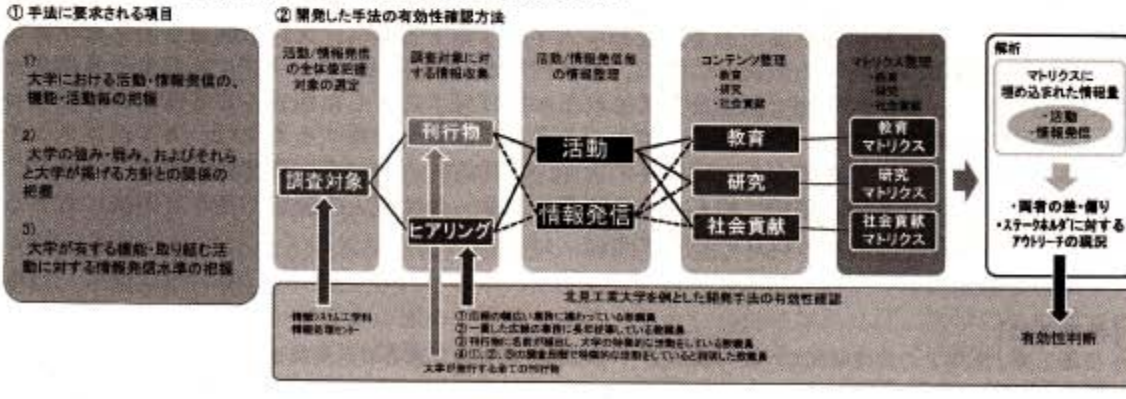
2）有効性確認方法

図1.②に開発手法の有効性確認方法を示す。北見工業大学は6学科13コースからなる工科系単科大学である[2)]。情報システム工学科は、前身である情報工学科が平成2年に設置され、平成22年に創立50周年を迎えた北見工業大学において一番若い学科である。そこで、情報システム工学科に的を絞り、活動と情報発信の実態調査と解析を行い、意図する解析・課題抽出が可能であるかを確認した。

3. 結果・考察・まとめ

得られたマトリクスから、ステークホルダに対して学内からの一括した情報発信がなされておらず、発信する情報の受け手である対象者毎に情報発信状況は大きく異なること、大学全体で運営している大きな研究や社会貢献活動について広範囲な情報発信が少ないこと、等の解析結果が得られた。この結果は、**図1.①**に示す3点について得ることができ、アウトリーチの質・量の向上に向けた課題の抽出、今後の大学アウトリーチの指針を得るための検討が可能になることが示された。以上のことから、開発した本手法の有効性が確認された。

図1. 大学のアウトリーチ活動の指針を得るための手法およびその有効性確認方法



1) 高橋、内島、鞘師：「大学のさらなる社会貢献に向けたアウトリーチのあり方～アウトリーチ活動の全体像把握方法の検討～」（2011. 12. 09.）、産学連携学会 関西・中四国支部 第3回研究・事例発表会（和歌山）
2) 北見工業大学ホームページ 学科とコース案内 http://www.kitami-it.ac.jp/public_relations/engineering/about_eng/course_info.html